

ゴンタニタツヤ:

はい、こんにちは。あえて「全世界の皆様へ」とここで呼びおこしたい(お呼びしたい)と思います。

日本の石川県七尾市に在住しております、ゴンタニタツヤと申します。

お母様:

ゴンタニヨシコです。(笑)

ゴンタニタツヤ:

(笑)ちょっとふざけた挨拶ですけど、僕の母親なんですね。

えっと、ここ数年、自分自身あの、終戦とかっていうときには何かをするという慣習がこれまであったのですが、あの、なんか年々ね、あの、時代の変遷っていうか、あの……眺めているうちにね、僕らが批判的に眺めていた終戦とか反戦とかっていう概念が、どんどんやっぱり良い意味でおきざり(置き去り)になっている感じがするんですよ。

そういったことがね、あの僕らの言動に反映して、例えばいろんな人の思いとか罪を許したりとか、償ったりとか、そういったことに世界が向かっていかなければいけないんじゃないかなと思うようになったんですね。

例えばうちなんかでも、いまだにあの、遺族年金とかをいただいたりとかしてるんですよ、国とか政府からね。そういった中で生活を営んでいる部分もちろんあるんですけど、でもっとそれをね、やっぱり人とか社会に還元していかないといけないんじゃないかなとかって、最近では思ったりします。お母さん、どうですか？

お母様:

そうですね……。まあ私、小さい時から知らなかったんですけど、あの、父の遺族年金っていうのをおじいさんが管理してたみたいなんですけど、成人するまでは、あの……少しですけど当たってた(届いていた)みたいなんですけど。結婚してからはそういうのは一切いただいてませんけど。まあおかげさまで、それで成長できたっていう感じがします。

ゴンタニタツヤ:

うん。あの、結構ね、僕も一時期その音楽の世界で、あの戦後補償とか反戦とかっていうことに重きを置いてやって。例えばあの、結構これはあの放送ではタブーなのかもしれないけど、例えば日本人が結構 30 年ほど前ね、東南アジアとかで結構悪いことしてきたっていう噂とかも聞いて。実際、新聞の記録とか見てると私実(史実)として残ってるんですね。こういったことって、ある意味戦争の残した罪悪感よりもよっぽどひどいんじゃないかなって思うことがあって。そういった意味においては、日本人ってそんなに他から思われるほど平和的だとかっていうことを強く言えるほど、なんていうかな、世界に誇れる生き方をしてきてないんじゃないかなって思うこともあったんですよ。

だから、でもね、やっぱりそういう、その迷惑をかけた国々がね、実際技術習得とか言って日本に来てくれて勉強とかしてくれて、国を豊かにするために努力されている姿とか見ていると、やっぱりみんな言葉は悪いけど、どっかで許してくれている部分もあるのかなと思ったりとかする部分があるんですよ。

って考えると、やっぱり僕らも同じようなことをしていかなきゃいけないと思うんですよ。だから今回あの、アメリカの資本のもとに動くラジオっていうのに僕が参画することによって、人によってはなんか「魂を売った」みたいに思われがちかもしれないですけど、でもこれもやっぱりすごく大事なことだと思うんです。本当に手を取り合ってっていうか、許し合って励まし合ってっていうか、そういうところがないと本当これからの先も、多分同じようなことを繰り返すと思うんですよ。現に今でも戦争やってますし。

それに対しやっぱり何らかの声は上げたいなという思いがありながらも、その声を上げるのは別にアメリカ(の政府)じゃないんですよ。アメリカの国民じゃないんですよ。

だからそういうことを考えた時に、誰が本当にその敵味方じゃなくて、誰と本当に分かり合わなきゃいけないのかなっていうことを考えたりすることが結構あるんですね。はい、お母さんどうぞ。

お母様:

えっと、どこだっけ……。

ゴンタニタツヤ:

分からなかったらいいよ(笑)。

お母様:

いや(笑)、やっぱり戦争はなかった方がいいに決まってるんですけども、いまだに世界の情勢を見ると、色々戦争してる国がたくさんある。これは本当、なんとかしないとみんなが、不幸せな人間が増えていくと思います。

ゴンタニタツヤ:

あの、いまだにね、ネットを見てると今ものすごい荒れてますよね。あの、まあ特に最近言われるのは「日本が軍国主義に向かうのではないか」とかっていう風な、そういう政策が進められているんじゃないかとかって。ただ最近情報は過多すぎて、なんか本当のことってその(政治家の)小林さんにしても、えっと何だ、防衛大臣にしても、本当の気持ちってというのは僕ら凡人には見えないところがあって。

あの、何て言うんですかね、まあ僕なんか結構カビン(過敏)に反応しちゃって、ドローン基地ができるの出来ないのってということとかでも結構過敏に反応して、行政とかに反応したら、ちょっと冷たい対応をされたぐらいで頭にきたこととかも正直あるんですけど。

ただやっぱり本当のこととか、もうちょっとオープンに開示しないといけないことってあると思うんですよね、世の中のことってね。例えば今のアメリカで言うならトランプ前大統領の意思がどこにあるのかっていうことを、本当にもう本人の口から発せられない言葉以外は、はっきり言ってガスネタ(ガセネタ)と一緒になので。そういうのってやっぱり、いつまで経っても打開しないと思うんですよね。

でもそういった意味においては、その日本のミュージシャンでも、やっぱり世の中のあらゆる事がもっとクリアにならないと先のことが見えないとかっていう人も居るんですね、正直言って。ただ僕自身もそうだと思うし、ただその全部がクリアになってオープンになった時に、世の中の人(は)もっと不安になるんじゃないか、不審(不信)になるんじゃないかっていう、そういうことも大いにあり得ると思うんですよ。

まあそういったこともね、こうやってラジオを通して、あのいろんな国の人のいろんな見方とか声とかっていうものが届くこの(FM)レキオ(の)ラジオネットワークは、それが結構叶い得る存在だと僕は思っているんですね。

まずあの、ロックを扱っている点がまず素晴らしいと思うんですよ。あの、音楽でとりわけね、あの最近のロックってどちらかというと攻撃性が強い音楽をやる人も多いので、そういったものを発信し続けることの意味、ましてや地方からっていうことの意味

を考えた時に、それは本当に僕はすごい本当に良い意味ですけど、良い意味で本当に爆弾とか核みたいな発言力というか発信力があると思うんですよ。

僕自身がやってきた音楽も、結構そういうところがあると人から言われるんですけど。気付いたらね、日・米・英・独・中っていう先進国5カ国(のメンバー)が集んで、あの反戦ロックやったりとかっていうのは普通、まず出来ないことだし。まあ仕掛けた僕も「結構いい度胸してるな」といろんな人から言われましたけど。

でもまあ、これだけやらないと変わらない社会だなという風に当時は思ってたんですよ。でももう、それを一旦やってしまった以上、次に目指すものは同じものではやっぱり意味がないと思うので。

はい、えっと今日の時点ではこういう風に番組をスタートするにあたって思っています。最後に、お母さん一言お願いします。はい。

お母様:

あ、あの、みんなが音楽を通じて平和な世界になってくれればいいなと思います。

ゴンタニタツヤ:

なんて簡単な挨拶なんでしょう(笑)。あ、でも本当にでも、そういうところですね、落ち着くのは。

はい、目一杯、あの、ジョンさんとも力を合わせてやっていきたいと思っています。皆さんよろしくお願いします。えっと、石川県七尾市のゴンタニタツヤでした。

お母様:

はい。ゴンタニヨシコでした。

ゴンタニタツヤ:

はい、今後ともよろしくお願いします。

えっと、放送が始まって最初の1時間ということで、すごく思い入れのあるナンバーをお届けさせていただきました。

えっとね、あのオープニングの曲っていうのはね、一所懸命、みんなが一所懸命作った楽曲で、あの……一言で言うと「DEW(デュー)」っていう、あの5人組の混成バンド、まあ俗にいう愛すべき野郎どもと作った楽曲だったんですけど、それを超えると言っている楽曲がね、あの僕の相棒である、ドイツ系中国人、現在フィリピン在住のね、セスリ・ベーン(Cesli Behn)君という、ま僕の場合は本当に世界一のコンポーザーと言っているんじゃないかなと思える……。

元々はね、あのピアニストだったんですよ。それが様々な人生経験を経て、EDM だとか DAW……で、今は AI とかも使ったりとかして、あの僕らみたいに何も無い状態からあの AI に飛び込んでいくのとは違って、本当にいろんな音楽というキャリアの中で、その自分の能力を最大限に引き伸ばすツールとして、現在 AI を選んでいる、すごく面白いキャリアを持ったことを今しようとしているんですね。

ま本当に、なんかもう彼と接している間に日々刺激があって、「え、これ俺の使ってる AI と全く出してる音が違うよ」っていうようなことが大いにあるんですよ。

まだみんなはそれが we(見えて)ないと思うんですけど、いつか彼のホームページを見た時に、「あ、こういうことをやってるんだ」って思った方が、大勢現れるんじゃないかなと思うんですよ。

単に正確なピッチ、リズム、表現っていうことを超越したというか、飛び越えたというか、そういう音が今現在でも見え隠れするんですね。

だから僕らの考えるテクニック、技術の発達と別の次元で、時代の変遷を先取りしているんですよ。

まあ本当にやっぱり、人間って常に進化の中で何か手を加えようとしているんだなって、彼を見ているとすごく思います。

ま本当に僕みたいな、素人に毛が生えたような、ま毛すら生えてないんじゃないか(笑)っていう人間の中で、一目置いてくれてね、やってくれるセスリ君の名前と顔を、僕は世に打ち出していきたいなと思って日々います。

それでは今後とも、あの色んな楽曲紹介していくんでよろしくお願いします。

ゴントニタツヤでした。

バイ。

サンキュー(Thank you)。

はい、世界中の皆様、こんにちは。

今日も、ゴンタニタツヤがお届けします。

今日はちょっとね、あの、僕のやってきた音楽を振り返るような特集をやりたいと思っています。

えっと、最初にお届けしたいのは、あの、僕が今、最もね、あの、大切にしてきたバンド……ワールド、えー何て言えばいいんだ、混成バンド。世界中の混成バンド「CURRENTOWA(カレントワ)」っていう5カ国の仲間、この間もちょっと紹介したんですけど、そこで作った3曲をお届けしたいと考えています。

その次は、えっと……んー、うまく言えないけど、僕が今ね、ちょっとキャンペーンにしている……すごね、あの、世界中のね、あの、女の子がすごくひどい目にあっている……性加害とか、児童虐待とか、そういったものに対するアンチテーゼを歌った楽曲の特集をやりたいと思います。

そして最後は、えっと、僕のローカル、能登で作った楽曲を、AIバージョンとリアルアーティストで繋いだバージョンの2つをお届けしたいと思っています。

えっと、僕は結構、一応音楽をやるときには、社会的な何て言うのかな、提言めいたようなものを題材にして作ることが多くて、あんまり恋愛ソングとかそういうのは、正直あんまり好きじゃないんですよ。うん。

それとね、あまりにも露骨な、あの、メジャー志向の強いものっていうのも、正直あんまり好きじゃなくて。

ま、できることならね、僕自身もそういう時期は確かにあったんですけど、本当に地元でね、ローカルで気の合った仲間といつまでも続けられるような音を続けていけたら、本当に幸せなんじゃないかなって思うことがあるんですね。

ま、僕もちょっとやっぱ、若気の至りというか、大して若くもないんですけど、誤ってその中央とか世界っていうことにやたら執着していた時期があったんですよ。その頃にやっぱり離れていった、僕からも離れていったそういう大切な仲間っていうのもたくさんいて、あの、取り戻したい、関係をやり直したいって思ったときには、もうそれが叶わなくてっていうことがいくつもありました。

えっと、今ね、僕 53 なんですけど、ひょっとしたらもう少し音楽を続けている間に、みんなとやり直せるっていうか、そういうチャンスがあれば、やっぱ今からでも取り戻したいなという気持ちはありますね。

多分そういうふうに思っている、今トップクラスのミュージシャンもたくさんいるんじゃないかなと思います。

やっぱりそういう気持ちがあるから、そういう優しい、温かい気持ちがあるから綺麗な音を作れるっていう部分も絶対あると思うんですよ。

若いときっていうのは本当に、やっぱり欲の塊じゃないですか。有名になりたい、立身出世欲、金銭欲……まあ、ちょっと嫌らしい言い方をすれば性欲みたいなものも含めて(笑)。えっと、そういったものが集積して、ある意味音楽を利用してた部分ってあるような気がするんですよ、僕自身も。

そういったところからね、一歩踏み出して、もっと深いところに届くっていうか、届けたい音を見つけ出せたら、またもう一歩、音楽をやっていく上での幸せとか生きがいっていうものを見つけられるんじゃないかなと思っています。

それでは、聴いてください。